

全地連

「技術フォーラム2001」新潟大会報告

2001.9.13~9.15

技術委員会

はじめに

2001年9月、全地連主催の「技術フォーラム2001」が新潟で開催された。この行事も今年で12回を迎えるが、今回は北陸地質調査業協会の協力、国土交通省北陸地方整備局の後援の下で運営された。期日は9月13日～9月15日の3日間であり、会場は新潟市内の「ホテル新潟」に設定された。参加人数は講師・来賓が17名、発表者が158名、一般参加者が292名等で、総勢が589名ということであった。東北地質調査業協会からも宮川理事長をはじめとして、若手・中堅技術者が多数参加している。



会場の「ホテル新潟」

なお、本大会のプログラム内容は以下のとおりであった。

9月13日(木):開会挨拶、特別講演、オープン講演、技術発表会、懇親会

9月14日(金):技術発表会、全地連報告

9月15日(土):現場見学会(オプション行事)

1.開会挨拶

開会に当たっては、主催者を代表して技術委員会の三木幸蔵委員より挨拶があった。同委員は前日勃発した同時多発テロに絡めつつ今後の厳しい社会情勢を予見するとともに、調査業界の更なる結束を訴えられた。



三木委員による開会挨拶

2.特別講演

特別講演は1日目の10:30から1時間半にわたって行われた。講師は帝国石油新潟鉱業所の牧武史所長が担われ、「石油鉱業における大深度掘削の現状」というテーマでお話しされた。その内容は油田開発における掘削技術の発展過程についてであり、日本での掘進実績の最高記録は約6300mであること、高温高圧下での大深度掘削は多大な困難を伴うこと等が紹介された。

3.オープン講演

オープン講演は1日目の13:00から1時間半にわたって行われた。講師はNHKの科学番組などで活躍されている濱田隆士放送大学教授が担われ、「ヒト属の地球環境の捉え方」というテーマでお話しされた。その内容は人間と自然・地球環境の関係についてであり、人間は自然の恩恵を受けながらも環境への配慮が欠如していること、極言すれば自分勝手過ぎること、結果的に環境は悪化の一途を辿っていること、いずれは手痛いしっぺ返しを受けること、人間は反省の必要に迫られていること等が唱えられた。

なお、同教授は自然・地球側の代弁者という立場でお話しされたとのことであり、開発促進派の我々にソフトな語り口なが

らも猛省を促されているようであった。



濱田先生によるオープン講演

4. 技術発表会

技術発表会は1日目の14:30から2日目の15:45の約1日半にわたって行われた。発表論文数はオペレーターセッションが13編、一般セッションが145編の全158編であり、一般セッションの内訳は以下のとおりであった。

- A: サンプルング・サウンディング6編、地すべり・動態観測4編、原位置試験8編
- B: 斜面18編、地すべり調査5編、地すべり解析5編、地すべり対策工4編
- C: 地盤改良6編、軟弱地盤・沈下6編、情報データベース・解析6編、解析5編、自然災害5編、その他4編
- D: 地下水6編、物理探査15編、その他4編
- E: 室内試験12編、ローカルソイル6編、環境5編、ダム・トンネル5編、リモートセンシング4編

これらは5つの会場に分けられて進められ、聴講者は若干出入りがあったものの各々50～80名であった。発表内容は現場即応的なもの、学究的なもの、将来性豊かなものなど多様であり、質疑応答では白熱した場面もみられた。

なお、今回特徴的だったのはパワーポイントの使用が目立ったことであり、今後は

その傾向に更に拍車がかかるものと想定される。



技術発表会(一般セッション)

5. 懇親会

懇親会は1日目の18:15から2時間にわたり、会場の一角で行われた。参加人数は400名程度とされ、コンパニオンとして新潟美人が花を添えた。まず最初に、北陸調査業協会理事長、全地連会長などの主催者から挨拶があり、引き続き国土交通省北陸地方整備局、新潟県土木部などの御来賓から御言葉を頂戴した。その内容はいずれも厳しい経済情勢を憂慮するとともに、建設業の重要性を訴えるものであった。その後歓談に移り、あちこちで交流の輪が形成された。会場には各種の出店が開設され、地元自慢の海の幸・山の幸が並べられた。コメドコロ新潟は酒の国でもあり、名酒の誉れ高い「越乃



懇親会(主催者と来賓の歓談)

